

ゲッベルス像の修正

中村 幹雄

【要約】 ゲッベルスを「無定見な日和見主義者」とする主張は、一九三〇年代と四〇年代のオットー・シネトラッサー派の著作に、その源をもっている。このようなゲッベルス像は、一九六〇年以降、大幅な修正を迫られるようになり、ごく最近では、かれをシネトラッサー兄弟とならぶナチ党左派のいま一つの急進的潮流として位置づけようとする主張さえあらわれるにいたっている。本稿は、一九二五〜二七年にかけてのゲッベルスの動向につき、一九六〇年以降の研究の歩みの中から生まれた諸見解の対立に批判と検討を加え、この時期におけるかれの思想、かれのヒトラーおよびシネトラッサー兄弟との関係を明らかにすることを意図している。これまで「闘争期」のナチ運動において、ゲッベルスの演じた役割については、どちらかといえば、宣伝家としての側面が重視されてきた。だがこの人物については、ナチ運動において演じた社会的機能がもっと重視されなくてはならないように思う。本稿は、そのようなゲッベルス再解釈のための一つの予備作業なのである。

史林 五九巻五号 一九七六年九月

まえおき

一九四〇年代と五〇年代に公刊された、いわゆる「カシフツアイト闘争期」(一九一九〜三三年)におけるゲッベルスの活動にふれた著作においては、かれを「無定見な日和見主義者」「権力欲と虚栄心にみちた変節者」とみなす見解がくりかえし語られてきた。このようなゲッベルス像の成立過程をさぐってゆくと、その源は、一九三〇年代と四〇年代に出版されたオットー・シネトラッサー派の刊行物、それも一九二五年秋に開催されたというナチ党のハノーヴァ会議および二六年二月のバンベ

ルク会議の席上における、ゲッベルスの振舞いにふれた、この派の記述の中に求められる。

いまオットー・シュトラッサー派によって提出されたゲッベルス像をまとめてみると、つぎの通りである。^①

(一) ナチ党内において社会主義的潮流を代表する中心的人物は、グレーゴル・シュトラッサーとオットー・シュトラッサーの両兄弟であった。彼らは、党内に社会主義路線を確立するために、一九二五年一月二二日、北部・西部ドイツのナチ党大管区指導者の会議をハノーヴァーに開催し、その席上、ナチ党北部・西部ドイツ大管区労働共同団 Arbeitsgemeinschaft der nord-und westdeutschen Gaue der NSDAP という組織を結成し、ヒトラーを先頭とするミュンヘン党本部の反動的路線と対決しようとした。

(二) このハノーヴァー会議で出席者たちは、ヒトラーの代理人として派遣されてきたフェーダーの反対を押切って、その当時、政争的となっていた王侯財産没収の賛成決議を行ない、また社会主義的な内容をもつシュトラッサー綱領を採択して、従来の党綱領にとって代えることを決議した。これは、ヒトラーの党指導にたいする公然たる闘争宣言にほかならなかった。

(三) この会議の席上で、グレーゴル・シュトラッサーの秘書ゲッベルスは、フェーダーを「ヒトラーのスパイ」ときめつけて、かれの会議参加を拒否するよう要求し、また王侯財産没収の件に関し、フェーダーがヒトラーの名において抗議すると、「小ブルジョワ・ヒトラー」の党外追放を叫んで、反ヒトラー活動の先頭になった。

(四) この「ハノーヴァーの謀反」に対抗するため、ヒトラーは巧みな術策を弄して、平日にあたる一九二六年二月一四日に、南部ドイツのバンベルクに会議を召集した。その結果、この会議においては、ヒトラー配下の南部ドイツの黨員が多数を占め、労働共同団側を代表して出席できたのは、グレーゴル・シュトラッサーとゲッベルスの両名だけであった。ところがゲッベルスは、会議開催前に、南部ドイツの党指導者たちの自家用車を目撃して、その豪華な生活に心を奪われ、ヒトラー側に寝返えることを素早く決意した。そこで会議の席上において、かれは、全力をつくして自らの綱領を擁護し

たシュトラッサーを、一身の榮達への抜け目ない計算から突然、裏切り、ヒトラーの主張に賛成する発言を行なった。このゲッベルスの裏切りにより、シュトラッサーは孤立し、その結果、ヒトラーは、かれの綱領を破棄させ、また労働共同団を解散させることにも成功して、北部・西部ドイツのナチ党組織の反乱を鎮めることができた。

(五) しかしバンベルク会議後も、シュトラッサー兄弟は、闘争を断念しなかった。彼らは、ベルリンの闘争出版社 *Kampf-Verlag* の活動を通じて、あくまでも革命的な社会主義路線を党内に貫くべく奮闘した。他方でゲッベルスは、この会議を機会に、ヒトラーの厚い信任をうけるようになり、バンベルク会議の報酬として、またシュトラッサー兄弟の活動を妨害する課題を託されて、ベルリン大管区指導者に抜擢された。しかしこの会議をきっかけに、ゲッベルスとシュトラッサー兄弟との関係は、ただちに険悪なものとなり、両者は不倶戴天の間柄となった。

この一九三〇年代と四〇年代に、オットー・シュトラッサー派の手によってつくられた、無定見な日和見主義者というゲッベルス像は、一九六〇年以降には全面的に修正されるようになってゆく。本稿においてわれわれは、まずゲッベルス像の修正の過程を逐一ふりかえり、ついでその修正の歩みの中から生まれてくる諸見解の対立点に批判と検討を加え、ハノーヴァとバンベルク会議前後の時期におけるゲッベルスの動向につき、真相に到達したいと思う。

- ① オットー・シュトラッサー派とは、一九三〇年にヒトラーと対立して、オットー・シュトラッサーとてちにナチ党を脱党し、革命的國民社会主義者闘争共同団 *Kampfgemeinschaft der revolutionären Nationalsozialisten* という組織を結成して活動したグループをいふ。以下の要約は、この派のつきのような刊行物によつてなす。Herbert Blank, *Adolf Hitler: Wilhelm III* (Berlin, 1931), S. 22/23, 67 u.

- 70-73: Richard Schapke, *Die Schwarz Front: Von den Zielen und Aufgaben und vom Kampfe der Deutschen Revolution* (Leipzig, 1932), S. 43-48; Otto Strasser, *Hitler und Ich* (Konstanz, 1948), S. 112-118. オットー・シュトラッサーの回想録は、はじめ *Hitler et moi* と題して一九四〇年にフランスで出版された。本稿では、同書ドイツ語版を使用する。

第一章 ゲッベルス像の修正の歩み

まずわれわれは、オットー・シュトラッサー派の手によってつくられたゲッベルス像が、一九三〇〜五〇年代にお

ける研究にそのまま継承されたことを、指摘しておかなければならない。すなわち、一九三二年に早くもハイデンが、ブランクとシャプケの著作に依拠して、ハノーヴァとバンベルクの両会議におけるゲッベルスの振舞いを記して以来、同じようなゲッベルス像が、一九四〇年代のリード、リースをへて、一九五〇年代のゲルリッツ、クヴィント、ブロック、ジャーマン^⑧へとひきつがれてゆく。彼らはすべて、オットー・シュトラッサー派の記述をほぼ全面的に信頼したまま、この派のゲッベルス像を再生産していったのである^⑨。

一九六〇年代に入ると、従来のゲッベルス像への修正が行なわれるようになってくる。

まずシャイラー、マンヴェル、フレンケルは、この当時には未公開であったゲッベルスの日記を利用しており、その成果のうえにたつて、バンベルク会議の席上におけるかれのグレーゴル・シュトラッサーからの離反を否定している^⑩。シャイラーによれば、ゲッベルスのヒトラーへの移行は一九二六年四月上旬～中旬にかけて行なわれ、シュトラッサーとの訣別は同年八月であったとされており^⑪、またマンヴェルとフレンケルは、ハノーヴァ会議におけるゲッベルスのヒトラー追放発言をはっきりと否認するとともに、ゲッベルスはバンベルク会議以後に、その急進的な社会主義思想を引っこめて、ヒトラーの保守主義に同調するにいたったと主張している^⑫。

つぎに取上げるシュッデコップの研究からは、以下のような新しい事実の指摘がみいだされる。すなわち、一九二五年一月二二日開催のハノーヴァ会議では、ナチ党北部・西部ドイツ大管区労働共同団が結成されるとともに、シュトラッサー綱領の作成が報告され、この綱領が北部・西部ドイツの大管区指導者たちの検討をまっして、翌二六年一月二四日開催予定のハノーヴァ会議で採決にふせられることが決定されたという^⑬。つまりハノーヴァ会議は、前後二回、開催されたのである。さらにシュッデコップは、バンベルク会議に関しては、ゲッベルスの突然の裏切り説に慎重な態度をとっており、しかもこの会議においては、シュトラッサー綱領は一度も討議にかけられなかったと指摘している^⑭。

以上に紹介したシャイラー、マンヴェル、フレンケル、シュッデコップの著作には、実はまだオットー・シュトラッサー

一派の主張に部分的にひきずられている面が散見される。だが彼らの研究は、従来のゲッベルス像から脱却する第一歩をふみだすものであった。

つぎにあげるハイバーの研究は、オットー・シュトラッサー派の主張からの脱却をさらに大きく押進めたものといえる。まずかれは、一九二五年当時のゲッベルスは、グレーゴル・シュトラッサーの秘書といった低い地位にあったのではなく、当時のラインラント・北部大管区で実施されていた合議制的な指導体制にもとづき、実質的には当地の大管区指導者の一人という重要な地位にしていたことを立証する^⑩。さらにハイバーは、労働共同団の第一回ハノーヴァ会議では、すでに起草されていたシュトラッサーの綱領草案のほかに、ゲッベルスとカウフマン起草の綱領が、翌年一月開催予定の第二回ハノーヴァ会議までに、完成させるべきことが決議されたとのべている^⑪。しかしハイバーは、第二回ハノーヴァ会議に関しては、王侯財産没収とシュトラッサー綱領の問題について「シュトラッサーゲッベルスの方向」が勝利したと、何故か曖昧な指摘を行なっているにすぎない。またかれは、ゲッベルスのヒトラー追放発言は行なわれなかったと主張しながらも、ゲッベルスが小規模な党員の集会で、同じ趣旨の発言をしたかもしれないと推測している^⑫。

ハイバーは、バンベルク会議に関しては、オットー・シュトラッサーの主張をしりぞけて、一九二六年二月一日は日曜日であったと指摘し、この会議にはグレーゴル・シュトラッサー、ゲッベルスとならんで、その他の北部ドイツの指導的党員も出席できたとのべている。この会議でヒトラーは、北部ドイツ派の行動を非難する演説を行なったが、これにたいしシュトラッサーの発言は、きわめて迫力を欠き、またゲッベルスはヒトラーの演説に大きな幻滅を感じ、かれを「反动」と考えた。だが他方でゲッベルスは、南部ドイツ派の権力、自動車、資金に心を奪われ、会議の席上では沈黙をつづけたという^⑬。

ハイバーによれば、ゲッベルスは、一九二六年四月上旬と七月末にヒトラーを訪問したさい、かれに全面的に心酔するようになり、ヒトラーのほうに移行するにいたったという^⑭。ただし、このことによってゲッベルスとシュトラッサー兄弟

との関係は、決定的に悪化しはしなかった。ハイバーは、二六年一〇月末、ゲッベルスのベルリン大管区指導者への就任を、かれのグレーゴル・シュトラッサーからの独立ととらえ、とくにかれが二七年七月にベルリンで『攻撃』Der Angriff紙を刊行して以来、シュトラッサー兄弟との関係は、急速に冷却化するにいたったと主張している。^⑮

労働共同団の動向とゲッベルスの振舞いに関する、従来の見解は、さらにシルトの研究により、決定的な修正を迫られるようになった。シルトによれば、グレーゴル・シュトラッサーは、党内に社会主義路線を確立し、またミュンヘン党本部からエッサーとシュトライヒャーを排除するという目的から、北部・西部ドイツの大管区を糾合する組織の結成を意図したという。この課題を、かれから依頼されたゲッベルスは、一九二五年九月一〇日、ハーゲンに北部、西部の大管区指導者たちの会議を召集し、その席上では、労働共同団の樹立、『国民社会主義通信』Nationalsozialistische Briefeの刊行が決定され、そして労働共同団の課題として、相互に政治上、組織上の経験を交流し、必要な場合には、共同で政治上の立場を表明するということが定められた。シルトによれば、この労働共同団は、当日の会議の出席者たちにより、ヒトラーに対抗するための組織ではないと了解され、むしろシュトラッサーとゲッベルスの意図は、ヒトラーを北部ドイツの党の見解に引きよせようとするところにあったという。^⑯

ついで開催された第一回ハノーヴァ会議では、シュトラッサー綱領草案がすでに起草されたことが報告されたほか、さらにゲッベルスとカウフマンが別箇に綱領を起草し、大管区指導者たちは、これら三通の綱領草案への意見書を提出し、翌年一月二四日開催予定の第二回ハノーヴァ会議で最終的に綱領の採択が行なわれるべきことが決定された。シルトは、第二回ハノーヴァ会議については、この会議で、王侯財産没収の決議が採択されたという従来主張をしりぞけている。会議の席上では、没収賛成と反対の立場が激しく対立し、妥協案として、王侯財産没収の場合には、一九一四年八月一日以降、ドイツに移住した東方ユダヤ人の財産没収と、同日附以降の銀行および取引所の増益をも同時に没収すべきであるという決議が成立した。^⑰ また会議の主要議題であった、新しい党綱領も結局は採択されなかった。この会議の席上には、

シュトラッサーとゲッベルスの綱領草案とならんで、多数の意見書が提出されたが、これらの提案の是非をめぐっても白熱的な討議がおこり、ついになんらの意見の一致をみるにいたらなかったというのが真相である。この綱領問題に関しては、シュトラッサーを長とする研究委員会でさらに検討をつづけ、成案が得られた場合には、それをミュンヘン党本部に提出するという案でやっと決着がつけられた。¹⁴⁾

シルトは、この会議では、ヒトラーの党首としての資格をめぐっても、激しい討論がまぎおこったという、これまでの研究では全く気づかれなかった討論の経過をも紹介している。この時、それまでのヒトラーの党指導への不満が堰を切つて溢れるようになり、一部の出席者はヒトラーとの決裂をさえ覚悟するまでとなった。シルトは、ゲッベルスのヒトラー追放発言は、この時の討議に関連があるのではないかと推察しているが、かれが実際にそのような発言をしたのかどうかは不明であると態度を保留している。¹⁵⁾

ついでバンベルク会議においては、まずヒトラーが長時間にわたる演説を行ない、王侯財産没収の問題に関しては反対の態度を表明し、さらにシュトラッサー綱領には、なんら言及することなしに、ただ綱領を論議すること自体をきびしく否認し、二五カ条綱領の不可侵性を強調した。これにたいしグレーゴル・シュトラッサーの発言は、内容と迫力を欠き、ゲッベルスは、沈黙を守りつづけた。ただしこの会議で労働共同団が禁止されるという事態は、起らなかった。

シルトも、バンベルク会議以後、ゲッベルスとシュトラッサー兄弟との関係がただちに決裂したという説を支持していない。ただしかれは、ゲッベルスがしだいにヒトラーの主張に接近し、かつての急進主義的見解を修正していったことに注目する。このような接近の理由として、ゲッベルスがバンベルクで南部ドイツの党指導者たちの家用車に心を奪われるような日和見主義のほかに、かれのヒトラーの人格への傾倒があげられている。シルトは、かれのグレーゴル・シュトラッサーからの離別は、「裏切り」ではなく、ヒトラーへの「改宗」¹⁶⁾であったと結んでいる。

このシルトの研究発表後に公刊された著作には、労働共同団とゲッベルスの振舞いについての新しい事実をさらに発掘

することは少なくなり、むしろ既知の事実に関する新しい説明や解釈をうちだすことのほうに、重点がおかれるようになってゆく。^②

一九六六年には、ノークス、ヴェルツ、ディクソン、キューンルの四つの研究が発表される。このうちノークス、ヴェルツ、ディクソンの研究は^③シルトのそれになら新しい事実をつけ加えるものではない。ただしキューンルが、ベルリン大管区指導者就任以後のゲッベルスを、その活動に照らして、シュトラッサー兄弟とならぶ、ナチ党左派のいま一つの潮流と位置づけたことは^④、注目してよい。

その翌年には、ニオマルケイの研究が発表されるが、かれの場合、バンベルク会議開催をめぐるヒトラーの意図の説明が注目に価いする。かれによれば、ハノーヴァ会議開催の目的は、シュトラッサー綱領へのヒトラーの支持を求めることにあった。ヒトラーは、党綱領の解釈をめぐる多様性が自己の意図する絶対的指導権の確立に抵触しない限りは、それを容認するつもりでいた。だがハノーヴァ会議が、新しい綱領にヒトラーを結びつけようとした時、その動きは、かれには自己の絶対的指導権の源にふれるものと映じた。^⑤何故なら、ヒトラーによる、この綱領の承認は、かれが綱領の実践に義務づけられることを意味し、そのような場合、かれは究極的真理の体現者として、時に応じて運動の進路に裁定を下す全能的指導者としての地位を保ちがたくなる。ニオマルケイは、ヒトラーがバンベルク会議を召集したのは、シュトラッサー綱領の内容を非として退けるためではなく、絶対的指導者としての自己の地位を明確にするためであったと主張している。なおかれは、ゲッベルスのグレーゴル・シュトラッサーからの離反は、かれがベルリン大管区指導者就任を了承した数週間後であるとのべている。^⑥

つぎにヒュッテンベルガーは、北部・西部ドイツの党組織の内部紛争に焦点を合わせて、ゲッベルスの動向を取上げている。すなわち、ラインラント・北部大管区は、一九二五年七月以降、ゲッベルスを含む三人の大管区指導者からなる合議制的な指導部により運営されていたが、このような指導体制は、同大管区が二六年三月に、ヴェストファーレン大管区

と合体してルール大管区を結成した時にも継承され、ゲッベルスを含む三人の大管区指導者により運営されることになった。ヒュッテンベルガーは、このような合議制的指導体制が、かえってこの大管区内の指導者間の紛争を激化させ、この内部対立がゲッベルスのヒトラーへの移行を促進したと主張している。^② この指摘も、おおいに注目するに値いする。

つぎのブラッハー^⑦、オーロウの研究からも、目新しい事実を拾い出すことはできない。ただしオーロウの研究には、バンベルク会議に関する新しい説明がもりこまれている。まずオーロウは、ナチ党員を中間層獲得をめざす「パイオニア」と労働者獲得をめざす「革命家」という二つの範疇に分類し、^⑧バンベルク会議でヒトラーは、北部ドイツ派、「革命家」の立場をしりぞけたばかりではなく、南部ドイツ派、「パイオニア」の立場に加担することも避けたと主張する。かれによれば、ヒトラーは、自らの人格を神話化し、自己の存在そのものを綱領にするという第三の道を選択したという。^⑨ なおオーロウは、一九二六年四月一三日附のゲッベルスの日記を、かれのヒトラーへの改宗の例証としてあげている。^⑩

一九七一年には、ライマンのゲッベルス伝が公刊される。かれは、第二回ハノーヴァ会議におけるゲッベルスのヒトラー追放発言は否定しているけれども、ゲッベルスが「ヒトラーは、社会主義を裏切った」という程度の発言はしつらしいとの推察を下している。^⑪だが他方でライマンは、二五年当時のゲッベルスの日記にもとづいて、かれはそもそもはじめからヒトラーの帰依者であったと主張し、^⑫さらにかれがグレーゴルシュトゥラッサーから離れて、ヒトラーのほうに移行するのは、二六年四〜七月にかけてであると指摘している。^⑬

ついで一九七二年には、ホルンとケルの研究が公刊される。このうちホルンの研究は、その多くをシルトとヴェルツトに負っており、かれの研究からもとりたてて目新しい事実をみつけだすことはできない。このホルンの著作については、ヒトラーがゲッベルスをベルリンに派遣したのは、闘争出版社にたてこもるシュトゥラッサー兄弟からの将来のイデオロギー攻勢に備えるためであったという指摘^⑭だけを、さしあたり紹介しておこう。

ケルの研究には、ナチ党内におけるゲッベルスの位置づけに関する興味深い主張がみいだされる。かれによれば、従来

の研究は、シュトラッサー兄弟のみをナチ党左派の中心的人物とみなし、その結果、ゲッベルスの低評価におちいってしまっているという^⑤。かれは、このようなゲッベルス評価に異議を唱え、一九二七年以降、ナチ党左派は、グレーゴル・シュトラッサーとゲッベルスを中心とする二つの陣営に分れたのだと主張している^⑥。なるほどゲッベルスをナチ党左派のいま一つの潮流とみなす見解は、すでにキューンルによって提唱されている。しかしキューンルが、実際には、このような指摘だけに止まって、ゲッベルスの活動には殆んど注意を向けなかったのにはたいし、ケルは、シュトラッサーとの対比を念頭において、ゲッベルスの活動を追跡した。その結果、かれは、シュトラッサーが三一―三二年には党内右派の政策に歩みよったのにたいし、ゲッベルスの急進主義は、一九二五年以降、一貫していたという主張をうちだす^⑦。さらにケルによれば、ゲッベルスがベルリン大管区指導者に任命された動機の一つは、かれの親労働者路線が、コムニスト勢力の根強いベルリンにはうってつけのものとしてヒトララーに映じたからであるという^⑧。

このようにケルは、日和見主義者ゲッベルスというイメージをもっとも強く打消し、逆に急進主義者として一貫していたのは、グレーゴル・シュトラッサーではなく、ゲッベルスのほうであったと説く。このケルの主張は、一九六〇年以降のゲッベルス解釈に重大な挑戦を投げかけるものといえるであろう^⑨。

以上で紹介した一九六〇年以降の研究で確認されたゲッベルス像を、ここで要約しておく、つぎのようになる。

(一) 労働共同団は、一九二五年九月一〇日、ハーゲンで開催の会議で結成され、その意図は、ミュンヘン党本部からエッサー、シュトラライヒャーを排除し、ヒトララーを北部ドイツの党の立場に引きよせることによって、党内に社会主義路線を確立するところにあった。

(二) 一九二五年当時のゲッベルスは、急進的な社会主義思想を信奉し、実質的には、ラインラント・北部における大管区指導者の一人として大きな声望をもつ有力黨員であった。

(三) 王侯財産没収とシュトラッサー綱領の問題が討議されたのは、一九二五年一月二二日開催のハノーヴァ会議では

なく、二六年一月二四日開催のハノーヴァ会議においてである。この日の会議では、王侯財産没収に関しては、実際上では没収を不可能にしてしまう妥協案が成立し、シュトラッサー綱領も、白熱的な討議の末、結局は採択されなかった。

(四) バンベルク会議（日曜日）には、労働共同団側の指導者たちも、多数、出席した。この会議の席上で、ヒトラーは、シュトラッサー綱領の内容にはならぬとふれることなく、綱領を討議すること自体を非とした。これにたいしグレーゴル・シュトラッサーの発言は、きわめて迫力を欠き、他方でゲッベルスは、ヒトラー演説に大きな衝撃をうけて、席上では沈黙をつづけた。

(五) この会議の席上で、ゲッベルスがグレーゴル・シュトラッサーを裏切り、ヒトラーのほうに鞍替えするような事態は起らなかった。しかしこの会議以降のある時期に、ゲッベルスはヒトラーのほうに移行し、またゲッベルスとシュトラッサー兄弟との関係は、決定的に険悪なものとなった。

つぎに以上に列举した共通の確認事項にもかかわらず、まだ残されている見解の相違点を整理してみると、以下の通りである。

(一) ゲッベルスの思想の変化の有無。(イ)かれはバンベルク会議以降、急進的な社会主義思想を修正（シルト）、ないし放棄した（マンヴェル、フレンケル）、(ロ)かれの思想は、この会議以降も一貫していた（ケル）。

(二) ゲッベルスのグレーゴル・シュトラッサーとの関係悪化の時期。(イ)一九二六年八月（リース、シャイラー）、(ロ)二六年一〇月末、ゲッベルスのベルリン大管区指導者任命以後（キューンル、ニオマルケイ）、(ハ)二七年七月、ゲッベルスの『攻撃』紙刊行以後（ハイバー）。

(三) ハノーヴァ会議における、ゲッベルスのヒトラー追放発言。(イ)否認（マンヴェル、フレンケル）、(ロ)同じ趣旨の発言をした可能性がある（ハイバー、ライマン）、(ハ)態度保留（シルト）。

(四) ゲッベルスのヒトラーへの移行の時期。(イ)バンベルク会議以降、しだいに移行（マンヴェル、フレンケル、キューンル、

シルト)、(d)一九二六年四月上旬(シャイラー)、(e)二六年四(六月(リース)、(f)二六年四(七月(ライマン)、(g)二六年四月上旬(ハイバー)、(h)ゲッベルスの二六年四月一三日附日記の中に移行を読みとる(ノークス、オーロウ)。

(四) ヒトラーが、ゲッベルスをベルリン大管区指導者に任命した動機。(イ)シュトラッサー兄弟の活動妨害のため(ブロック)、(ロ)シュトラッサー兄弟のイデオロギー攻勢に備えるため(ホルン)、(ハ)ゲッベルスの親労働者的な急進主義が、コムニスト勢力の強いベルリンには適切と考えられたため(ケル)。

われわれは、このような見解の対立点を一つ一つ解決してゆく手続きを通して、ゲッベルスについての、より一層正確なイメージをもつことができるようになるであろう。以下の章において、われわれは、それぞれの主張の根拠を検討してみることによって、ゲッベルス像の真相にさらに一層迫りたいと思う。まず次章においては、ゲッベルスのいわゆる社会主義思想の変化の有無を検討することから、考察を始めてみたい。

① Konrad Heiden, *Geschichte des Nationalsozialismus: Der Kampf einer Idee* (Berlin, 1932), S. 206/207 u. 216/217.

② Douglas Reed, *Nemesis?* (London, 1942), pp. 84-89; Curt

Riess, *Joseph Goebbels: Eine Biographie* (Baden-Baden, 1949), S. 37/38. ただしリースは、この当時には未公開であった一九二五～二六年間の出来事を取扱ったゲッベルスの日記を参照する機会にめぐ

まれており、従ってかれは、ゲッベルスがハンムルク会議の席上で即座にヒトラー側へ移行したという、従来の記述には疑問を投げかけている(S. 40)。リースは、ゲッベルスの日記を検討して、かれのヒトラーへの移行は二六年四(六月にかけて行なわれ、かれとグレーゴル・シュトラッサーとの対立は、同年八月から始まると主張している(S. 40-43)。このようにリースは、オットー・シュトラッサー派の主張から一步、脱却する道を見だしてはいるが、これ以上、さらに突込んで、ハンノーヴァーとハンムルクの両会議の経過を洗い直してみることが

必要は、探究の筆が及ばなかった。

③ Walter Gorlitz u. Herbert A. Quint, *Adolf Hitler: Eine Biographie* (Stuttgart, 1952), S. 256 u. 258/259; Alan Bullock, *Hitler: A Study in Tyranny* (London, 1952), pp. 122-125; T. L. Jarman, *The Rise and Fall of Nazi Germany* (London, 1955), pp. 125/126.

④ なるほどゲッベルス系統の人物の手による、もっともはやゲッベルスの伝記の一つとして、Wilfried Bade, *Joseph Goebbels* (Lubbeck, 1933) が刊行されている。しかし、これはこの伝記の中で、ハンノーヴァーとハンムルクの両会議におけるゲッベルスの振舞いについては、なにもふれてはいない。このような事情も、オットー・シュトラッサー派のゲッベルス像が疑問視されることもなく継承されたことを助けたと考えられる。

⑤ William L. Shirer, *The Rise and Fall of the Third Reich: A*

- History of Nazi Germany* (New York, 1960) 『第三帝国の興亡——第一巻』(東京元新社・一九六一年) 井上勇訳、二〇五ページ。Roger Manvell & Heinrich Franke, *Doctor Goebbels: His Life and Death* (1960) 『第三帝国の巨頭——ゲッペルスの生涯——』(東京元新社・一九六二年) 樽井近義・佐藤進訳、五二二ページ。
- ⑧ ショアラー、二〇六—二〇七ページ。
- ⑨ フンクハル、ノンナン、五〇—五三ページ。
- ⑩ Otto-Ernst Schüddkopf, *Linke Leute von rechts: Die national-revolutionären Minderheiten und der Kommunismus in der Weimarer Republik* (Stuttgart, 1960) 『ドイツ米極右派 回教の集 団及びドイツの Nationalsozialismus in Deutschland 1918-1933 (Frankfurt/M. u. a., 1972), S. 182 を引用する。
- ⑪ *Ibid.*, S. 183.
- ⑫ Helmut Heiber, *Joseph Goebbels* (Berlin, 1962), S. 50.
- ⑬ *Ibid.*, S. 50/51.
- ⑭ *Ibid.*, S. 52.
- ⑮ *Ibid.*, S. 67.
- ⑯ Gerhard Schild, *Die Arbeitsgemeinschaft Nord/West: Untersuchungen zur Geschichte der NSDAP 1925/26* (Phil. Diss., Universität Freiburg, 1964), S. 110/111.
- ⑰ *Ibid.*, S. 145/146.
- ⑱ *Ibid.*, S. 146-148.
- ⑲ *Ibid.*, S. 151.
- ⑳ *Ibid.*, S. 173.
- ㉑ ドイツ Karl O. Paetel, *Versuch oder Chance?: Zur Geschichte des deutschen Nationalsozialismus* (Göttingen, u. a., 1965), S. 209/210 及び ペーペー、ミンネアポリス、一九六五年の記述が、再校正の元々の本と異なり、修正されている。
- ㉒ Jeremy Noakes, *Conflict and Development in the NSDAP 1924-1927, Journal of Contemporary History*, 1, 1966, pp. 19 ff.; Ulrich Wortz, *Programmatische und Führerprinzip: Das Problem des Strasser-Kreises in der NSDAP* (Phil. Diss., Universität Erlangen, 1966), S. 78-129; Joseph M. Dixon, *Strasser and the Organization of the Nazi Party 1925-32* (Ph. D. dissertation, Stanford University, 1966), pp. 97-124. ノーベグマンが「一九二六年四月十三日附ゲッペルスの日記の中で、かれのエスタークの「暴快」を語るとき、その手を指摘し、それを知った(Noakes, op. cit., p. 31)。
- ㉓ Reinhard Kühnl, *Die nationalsozialistische Linke 1925-1930* (München/G., 1966), S. 145-150. ただしエスタークは「ミンネアポリス」の編輯が第二回（ノヴァ会議）多数の出席者として承認されたという点に問題を抱持している（S. 19）。またかれは「ミンネアポリス」会議後に行われるゲッペルスのエスタークの接近が、日和見主義から知られたものか、それとみられる信念が、かれの「ドイツの移行は、徐々に起こせられたものだが、またかれは、エスタークと兄弟の間の悪化が、かれのゲッペル大管区指導者候補と異なり、その点で異なる（S. 45, Anm. 18)。
- ㉔ Joseph Nyomarkay, *Charisma and Factionalism in the Nazi Party* (Minneapolis, 1967), p. 33.
- ㉕ *Ibid.*, p. 85, fn. 47.
- ㉖ Peter Hüttenberger, *Die Gaulen: Studie zum Wandel des Machgefüges in der NSDAP* (Stuttgart, 1969), S. 36-38.
- ㉗ Karl D. Bracher, *Die deutsche Diktatur: Entstehung Struktur Folgen des Nationalsozialismus* (Köln u. a., 1969), 『ゲッペルスの興衰』一、山口京・高橋義雄（岩波書店、一九七五年）二四三—二四六

四一六。

② Dietrich Orlow, *The History of the Nazi Party 1919-1933* (Pittsburgh, 1969), pp. 47-49.

③ *Ibid.*, p. 69.

④ *Ibid.*, p. 72.

⑤ Victor Reimann, *Dr. Joseph Goebbels* (Wien u. a., 1971), S. 45/46.

⑥ *Ibid.*, S. 50 u. 45.

⑦ *Ibid.*, S. 66-72.

⑧ Wolfgang Horn, *Führerideologie und Parteiorgansiation in der NSDAP 1919-1933* (Düsseldorf, 1972), S. 247.

⑨ Max H. Keler, *Nazis and Workers: National Socialist Appeals to German Labor 1919-1933* (Chapel Hill, 1972), p. 166.

⑩ *Ibid.*, p. 107.

⑪ *Ibid.*, p. 174.

⑫ *Ibid.*, p. 104.

⑬ 44年 Joachim C. Fest, *Hilfer: Eine Biographie* (Frankfurt/M. u. a., 1973) 『ヒトラー』(上) 赤羽・関・永井・佐瀬訳(河出書房新社・一九七五年)は、シルト、ケルの研究を参照してはいない。従ってフェストの研究からは、一九二五〜二六年のゲッベルスの動向に関して「新しい説明を聞くことはできない」。Gerhard Schulz, *Aufstieg des Nationalsozialismus: Krise und Revolution in Deutschland* (Frankfurt/M. u. a., 1975) の記述が基本的には同様であるが、ただしシルトが「ヒトラーへの移行後のゲッベルスを、依然としてナチ左派の中に救えあげており、またかれは決して日和見主義者とはみなしえな」と主張していることは、この章で注目してみたい。(S. 391 u. 407)。

第二章 ゲッベルスにおける思想の変化の有無

まずはじめに、バンベルク会議以後、ゲッベルスが以前の見解を修正したと説く、シルトの主張を検討してみることにしてしよう。かれがあげる主な根拠は、以下の通りである。

(一) ゲッベルスは、『レーニンかヒトラーか』と題する演説の草稿の最初の部分を、一九二六年二月末もしくは三月はじめ頃に、ついで残りの部分を四月三日に、シュトライター出版社に送附した。シルトによれば、この期間は、丁度ゲッベルスのグレーゴル・シュトラッサーからヒトラーへの移行期にあたっており、この期間にゲッベルスは、従来のロシア論に再検討を加えた。従って『レーニンかヒトラーか』には、シュトラッサーとヒトラー双方の主張が反映されているといふ^⑭。

すなわちゲッベルスは、この演説の中で、レーニンの農業改革と工業改革とを峻別し、後者に関しては、それがマルク

ス主義の原則にもとづいて実施されたため、ロシア経済は崩壊し、ついにウォール街に救援を要請するにいたったと指摘し、その結果、ポリシェヴィズムは、資本主義の手中にある一つの道具と化したと主張している。シルトは、ここにゲッベルスの見解の修正のあとを読みとっている。何故ならゲッベルスは、以前には、ロシアを「真に国民的で社会主義的な」国とみなしていたからである。他方でシルトは、ゲッベルスがレーニンの農業改革を、ロシア民衆の国民的な要求を実現したものと、従来通り称讃しつづけている記述に注目する。③そしてシルトは、レーニンの農業改革への高い評価は、シュトラッサーの見解を反映し、工業改革への低評価は、ヒトラーの見解に応じたものとみなし、ここにシュトラッサーからヒトラーへの移行期における、ゲッベルスの主張の矛盾と修正のあとを読みとっている。

(二) 一九二六年四月八日、ゲッベルスは、ヒトラーの招待をうけてミュンヘンで演説した。シルトによれば、ゲッベルスは、ミュンヘンでは社会主義的煽動を行なうと、あらかじめ友人たちに約束していたにもかかわらず、当日の演説では、社会主義はそれ自体、目的ではなく国民主義実現のための手段であると主張し、その結果、かれはミュンヘンにとりいるために、社会主義を裏切ったという印象を、労働共同団の一部の党員にあたえたという。④

シルトがあげる、以上のような根拠には、いくつかの疑問がただちに浮びあがってくる。まず(一)の問題について考えてみよう。

ゲッベルスの『レーニンかヒトラーか』の草稿は、たしかに一九二六年二月末もしくは三月はじめ頃と四月三日の二回にわけて、シュトライター出版社に送附されている。⑤しかしゲッベルスは、それ以前の二月一九日にケーニヒスベルクのオペラ座で『レーニンかヒトラーか』と題する演説を行なっているのであり、実際にシュトライター出版社から公刊されたものは、この日の演説なのである。⑥従ってかれが第一回目と第二回目との草稿送附の期間に従来のロシア論に再検討を加えたという、シルトの主張はなんらの根拠がない。

またゲッベルスのロシア論に関する、シルトの解釈そのものも納得がゆかない。なるほどゲッベルスは、一九二五年に

發表した二つの論說の中で、レーニンの農業改革を、ロシア農民の「国民的本能」に応じたものとして、高く評価している。他方でかれは、この両論說の中では、レーニンの工業改革にはなら言及していない。この問題に関するゲッベルスの評価が登場するのは、たしかに『レーニンかヒトラーか』においてであり、ここではかれは、ロシアの社会主義的性格を否定するような、きわめて低い評価を下している。^⑧

だがゲッベルスは、シルトが指摘したようには、一九二五年当時のロシアを、「真に国民的で社会主義的な」国とみなしていたのではない。かれの以下の主張をみてみよう。

「ロシアが、これを最後として目ざめたならば、その時には世界は、国民的奇蹟をみるであろう。……この目ざめは、ロシアに社会主義的な国民国家をもたらずであろう」^⑩「われわれがロシアに注目するのは、ロシアがもっとも早く、われわれとともに社会主義の道を歩むであろうからである」^⑪。このようにかかれは、あくまでも仮定のうえにたつて、自己の論を展開しているにすぎないのである。ゲッベルスは、二五年の時点で、ロシアを国民的な社会主義を樹立した国とはみなしていなかった。それ故、シルトのように、レーニンの工業政策への低評価から、ゲッベルスがロシアを「真に国民的で社会主義的な」国とみなしていた、以前の見解から後退したという主張を引きだすことはできない。ましてそのような後退を、ヒトラーの影響に帰せしめるのは、早計にすぎるといわなければならない。^⑫

つぎに(二)におけるシルトの根拠を検討してみよう。この(二)においてシルトは、ゲッベルスが国民主義と社会主義との関係を、目的―手段関係としてとらえているのに注目し、ここにかれの主張の修正を読みとっている。だがかれは、バンベルク会議後に、果して両者の相互関係を変更したのであろうか。

それ故、まずバンベルク会議前の時期における両者の関係を、考察してみることによしよう。ゲッベルスは、一九二五年執筆のある著述の中で、国民社会主義の最終目的を「ドイツの自由」と主張しており、それを実現する方法として「この目的は、まずなによりも、わが民族内の無権利な部分であるドイツの労働者層を……賃金奴隷の状態にあることから解放

することによって達成される」とのべ、その時には、ドイツの労働者も再び祖国愛をもち、「再び国民的にものを考え、感ずるようになるであろう」と指摘している。¹⁷このようにかれは、「ドイツの自由」（国民主義）を目的ととらえ、それを実現する手段として、労働者の社会的解放（社会主義）の时期的・段階的先行の必要性を主張する。

それでは、このような国民主義と社会主義との関係は、バンベルク会議以後に変化をみせるのであろうか。かれは、ある論説で「社会主義は、君たち〔ごふしと額の勤労者 Arbeitertum der Faust und Sittm を指す——引用者〕によってなしとげられる。社会主義によって、君たちはドイツを解放するであろう」とのべ、また別の論説で「われわれは、社会主義者である。何故ならわれわれは、社会主義の中に……われわれの政治的自由の再獲得とドイツ国家の更新への唯一の可能性をみるからである」と語っている。¹⁸このようにゲッベルスは、バンベルク会議以後においても、社会主義の时期的・段階的先行を説きつつ、社会主義を通じて国民主義を実現すべきことを主張する。われわれは、以上の考察から、かれにおける国民主義と社会主義との関係は、バンベルク会議前後を通じて変化がなかったと断言することができる。シルトがあげる根拠は、前述の(二)においても妥当しない。

それではつぎに、ゲッベルスがその急進的な社会主義思想を放棄したと説く、マンヴェルとフレンケルの主張を検討してみよう。この両者は、実は放棄説を唱えながらも、バンベルク会議前のゲッベルスの思想を断片的に紹介しているだけであり、しかもこの会議前後の時期にわたって、かれの思想を比較検討するという手続きをとってはいない。それ故、この両名のような主張にたいしては、バンベルク会議前後の時期にわたってゲッベルスの思想の核心とでもいべきものを取出し、その変化の有無をさぐってみるしか当否を検討する方法は残されていない。まずバンベルク会議前におけるかれの思想を取上げてみよう。

われわれは、ゲッベルスの構想の根底にあったものは、労働者と国民との結合、ないし彼らの国民の中への統合の主張として理解してゆけば、かれの思想の核心をとらえることができるであろう。この点で、かれがドイツの現在の不幸な事

態の由来を、第二帝政、第一次世界大戦、一月革命にではなく、一九世紀中葉以来のドイツの工業化の中に求めている一節が参考になる。この工業化の進展により、数百万の都市労働者がうみだされたが、ゲッベルスは、彼らは「国家と国民から疎外される状態に追いこまれた。何故なら、民族の指導層は、彼らを国民の中へ引き入れ、彼らを一喜一憂させながら、国民という存在と結びつけることをわきまえていなかったからである」と指摘し、ひきつづいて、「国家という結集体からとき放された」労働者が、マルクス主義労働運動の側に走ったにもかかわらず、「ブルジョワジーは、かたくなに拒絶しながら、このような発展を傍観していた。彼らは、犠牲をはらってでも、第四階層を国民へと結合しようとする試みを決して行なおうとはしなかった」と、労働者問題にたいするブルジョワジーの冷淡な態度を非難する。そしてゲッベルスは、このようなブルジョワジーの態度から生じた「国民」の内部分裂を克服することの中に、かれの本来の課題をみいだしているのである。

ゲッベルスは、階級闘争の存在を事実として認め、また労働者の経済闘争をも「正当性をもつ」として容認している。しかしかれは、理念的には「階級闘争は、ドイツ民族を二つの部分、すなわち使用者と被傭者へと分裂させ、一つの国民になることを不可能にしてしまう」とのべて、階級闘争を否認している。だがこの主張は、かれが伝統的な国民主義の信奉者であることから由来するのではない。かれは、ブルジョワジーの説く国民主義を批判して、つぎのようにのべている。「ブルジョワジーが国民的になるのは、国民的思想が彼らに財産と平穏と秩序とを保障する限りにおいてのみである」と。またかれは、別の論説では、ブルジョワジーにおいては「国民的であることは、社会的であることは、絶対に結びつかない事柄である。強固に国民的となればなるほど、それだけ一層、残忍に非社会的となる」とのべて、ブルジョワジーの主張する国民主義が、実は彼らの経済的利益擁護のイデオロギーにほかならないことを指摘するとともに、彼らの説く国民主義の中には、社会問題解決のための契機が欠如しているときめつけている。

代ってゲッベルスは、新しい社会主義的な国民主義を主張する。すなわち「国民的と社会主義的」という概念は、矛盾し

あうであろうか。否、その反対である。真に国民的な人は、社会主義的にものを考えるのである」と。ここから、国民主義を実現するにあたっては、まず社会主義の樹立が必須の前提となるという、かれの前述の構想がでてくるのである。

それではかれは、どのようにして国民内部の亀裂を克服し、新しい民族共同体、つまり社会主義を樹立しようとするのであろうか。実は、かれの構想においては、この肝心の部分をもっとも不明瞭なのである。なるほどゲッベルスは、プロレタリア国際主義を信奉する労働者を再び国民の中へ統合する方策として、彼らに「所有への参加」「所有権」をあたえることを強調し、この構想は、一九二六年二月中旬までに執筆された、かれの論説にしきりと顔をのぞかせてきている。^② だがかれの論説からは、その具体的な方策についてなんらの説明を聞くことができない。それ故、かれの意中にあつたものを推測してみるほか手段が残されていないのであるが、結論をのみここに記しておけば、かれの構想は、労働者に一定の割合で企業の株券を配分することであつたと考えられる。^③

このようにゲッベルスの構想は、その具体的方策についてはきわめて不明瞭であるけれども、民族共同体への移行にあり、かれが希望を託した社会層についての指摘は、注目しておいてよい。かれは、民族共同体への移行にあたり、プロレタリアートの演ずるべき役割に大きな期待をかけている。かれは、「この目的〔国民の完成の意——引用者〕は、この両グループ〔ブルジョワジーとプロレタリアートの意——引用者〕のうちのどちらか一方……によってのみ、たたかいとられる。ブルジョワジーが、われわれの闘争に役立たないならば、資本主義の鎖からのドイツの解放に必要な闘争グループを、いわゆるプロレタリアートの中に求める以外に、いったいなが残されているのであろうか」とのべ、つぎのようにプロレタリアートへの信奉を告白している。「わたくしは……被抑圧者の一人として……彼らの側にたつ。わたくしは、生活のためたたかいが行なわれているところにたち、たちつづけるであろう。……わたくしは、プロレタリアートを信ずる。……わたくしは、プロレタリアートの中における社会主義を信ずる」と。^④

以上に紹介した、バンベルク会議までのゲッベルスの主張は、それではこの会議以後、変化をみせるのであろうか。

なるほどバンベルク会議後のかれの論説には、現存の国家を「ブルジョワ的階級国家」ときめつけるような、新しい用語が登場する。だがゲッベルスは、この「ブルジョワ的階級国家」においては、「一七〇〇万人のプロレタリアは、一切の生産手段を手中に結合している資本主義に無条件に引渡され、こうしてもっとも低廉な価格で、自己の唯一の資本である労働力を販売することを余儀なくされる。それ故、彼らは、共同体……それが民族、国家、国民と呼ばれようとしてから排除されていると考えているが、これは正しいことである」とのべて、やはり労働者の「国民」からの排除という局面を指摘している。

またゲッベルスは、バンベルク会議後も、「所有への参加」を説きつづけている。ただしその具体的な内容は、あいかわらず漠然としている。なるほどかれは、交通手段、トラスト、コンツェルンなどの国有化、土地、河川、山、森林、地下資源は、原則としては民族の所有物であるべきだが、現在の所有者がそれらを全体の利益に反して悪しざまに管理した場合には、国家の手による没収を提案している。だが一般に私企業に関して、かれは、創造的才能を必要とする企業は、各人の私有にゆだねられるべきこと、および「こぶしフックスであれ、額シュナイツであれ、創造的に生産しているすべての人びとが、所有と生産の利益に広範囲に参加する保障を、国家がひきうける」ことを、提案しているだけにすぎない。

民族共同体への移行に関しては、バンベルク会議前と若干ニュアンスの異なる主張がみいだされる。なるほどかれは、「階級としてのブルジョワジーが……新しい「ドイツの——引用者」形成をなしとげうるなどと考えるのは、迷信である。……ブルジョワジーは、階級として自らの歴史的役割を演じ終っており、もっと若い、健全な階級の創造的精神に道をゆずらねばならないであろう」とのべて、ブルジョワジーには、依然として、期待をよせてはいない。だがかれは、労働者とホワイト・カラーの双方を包括する概念として「勤労者層アルタイム」という言葉を使用しながら、ひきつづいて以下のように主張している。「ブルジョワジーに代って、勤労者層という若い階級……が登場する。この勤労者層は、未来に向ってドイツのために活動するすべてのもの……を内包している」と。このようになれば、民族共同体の樹立にさいしプロレタリ

アートの演ずるべき役割に大きな期待をかけるとともに、ホワイト・カラーの役割にも、より一層大きな力点をおくようになってゐる。この点が相違といえれば相違といえるであらう。だがわれわれは、以上の考察全体を通じて、マンヴェル・フレンケルの主張とは異なり、ゲッベルスの思想は、マンヴェルク会議前後において基本的な変化のないことを認めること^{②③}がでせう。

ゲッベルス像の修正(中村)

- ① Schild, *op. cit.*, S. 174 u. 175.
- ②③ *Ibid.*, S. 175.
- ④ *Ibid.*, S. 176.
- ⑤ Brief Fritz Tittmann an Goebbels vom 2. März 1926, Bundesarchiv Koblenz (以下 BAK 以下略記) NS 1 339 II/351; Brief Goebbels' an Fritz Tittmann vom 3. April 1926, *ibid.*, 339 II/341. 以下 BAK Fritz Tittmann 以下 シタルトマン 出版社の略記に用ゐる。
- ⑥ Goebbels, *Lenin oder Hitler?*: *Eine Rede, gehalten am 19. Februar 1926 im Opernhaus in Königsberg i. Pr.* (Zwickau, Streiter-Verlag)
- ⑦ Nationalsozialismus oder Bolschewismus?, *Nationalsozialistische Briefe* vom 15. Okt. 1925; Das russische Problem, *ibid.*, 15. Nov. 1925. 以下 同誌を NS Briefe 以下略記する。
- ⑧ *Lenin od. Hitler?*, S. 18.
- ⑨⑩ Das russische Problem, NS Briefe v. 15. Nov. 1925.
- ⑪ このくだりに指摘して述べたのは、『レーニンかヒトラーか』と題する稿説が行なわれた一九二六年二月十九日はマンヴェルク会議の五日後であり、ゲッベルスのヒトラー訪問(四月上旬)以前である。わずか五日間で、シルトの主張するやまやかな見解の修正を生ずるのさういふことが、それ故、本稿におけるは、以下『レーニンかヒトラーか』を『マンヴェルク会議までのゲッベルスの主張がもたらされた史料として取扱ふ』。
- ⑫ *Das kleine abc des Nationalsozialisten* (Greiswald, o. J.), S. 16, BAK NS 26/1224. 以下マンヴェルクの著述を公刊したのち一九二五年一〇月(以下) *(Das Tagebuch von Joseph Goebbels 1925/26, hsg. v. Helmut Heiber [Stuttgart, 1961], S. 37, 以下略記)* 以下 略記する。
- ⑬ Proletariat und Bourgeoisie, NS Briefe v. 1. Nov. 1926.
- ⑭ Warum sind wir Sozialisten?, *Der Angriff* v. 16. Juli 1928.
- ⑮⑯ *Lenin od. Hitler?*, S. 5.
- ⑰ Klassenkampf und Volksgemeinschaft, in Goebbels, *Die zweite Revolution: Briefe an Zeitgenossen* (Zwickau, o. J.), S. 14. 以下この論説集をZRと略記する。なおこれに、かれが一九二六年一月四日(以下)論説集の論説をみよふ。同年六月に公刊したもののやま(以下) *(Tgb v. 4. Januar u. 21. Juni 1926)*。
- ⑱ Der Glaube an das Proletariat, ZR, S. 55/56.
- ⑲ *Das kleine abc*, S. 5.
- ⑳ Die Radikalisierung des Sozialismus, NS Briefe v. 15. Dez. 1925.
- ㉑ *Lenin od. Hitler?*, S. 6.
- ㉒ *Das kleine abc*, S. 4.
- ㉓ 拙稿「ゲッベルスの国民社会主義像——一九二五年～一九二六年初頭における——」『歴史学』二〇号・一九七四年、八九～九ページを参照。

照された。

⑳ 同二〇一ページ。

㉑ Die Radikalisierung d. Sozialismus, *NS Briefe* v. 15. Dez. 1925.

㉒ Der Glaube an das Proletariat, *ZR*, S. 57.

㉓ *Der Nazi-Sozi: Fragen und Antworten für den Nationalsozialisten* (Eibelfeld, o. J.), S. 5. 筆者は、この著述の出版年代が、現代史研究所 Institut für Zeitgeschichte (在フランク) のハートハイマー博士に書簡で問い合わせたところ、このような御教示を得た。すなわちゲッベルスの日記の原文は、手書きであり、一九二六年一月十六日附の箇所には、*Mein neuer Nazisozi ist...*とあり、以下、原稿破損のため、判読が不可能であるが、この文章の末尾には、*fertig* もしくは *erschienen* という語を補なうべきであろう。

第三章 ゲッベルスのグレーゴル・シュトラッサー

およびヒトラーとの関係

この章では、ゲッベルスのグレーゴル・シュトラッサーとの関係悪化の時期、およびかれのヒトラーへの移行の時期に関する諸説の対立を検討してみることにしよう。

ゲッベルスが、当初、グレーゴル・シュトラッサーときわめて親密な協力関係にあったことは疑いない。かれは、シュトラッサーとともに例の労働共同団結成の意図を固めていた頃の日記に、「かれと一緒に活動することになるのだ。なんとすばらしい人物がいることであろう」と記している。またこの両者の協力関係は、ゲッベルスがシュトラッサーの依頼をうけて、労働共同団の創立会議を、一九二五年九月一日ハーゲンに開催するべく努力し、また一〇月九日には、この両者の署名入りの労働共同団規約が発表されるにいたったことからも明らかである。

と。ゲッベルスがこの著述を上梓ないし出版したのは、二六年一〇月中旬と考へよう。

㉔ *Ibid.*, S. 14.

㉕ Soziale Frage und Student, *NS Briefe* v. 1. April 1926; Was will der deutsche Arbeiter?, *Der Angriff* v. 13. Okt. 1929.

㉖ *Der Nazi-Sozi*, S. 15.

㉗ *Ibid.*, S. 11.

㉘ *Ibid.*, S. 12.

㉙ ただし本稿では、ゲッベルスの主張の検討は、一九二八―二九年頃までにしか及んでいない。従って、ヴァイマル期におけるかれの主張の一貫性を説くケルの見解の当否には、全面的な検討ではふれないでしまつてゐる。

ところでここで問題になるのは、ハーゲン会議から第二回ハノーヴァ会議までの期間における、ゲッベルスとグレーゴ
ル・シュトラッサー両名のヒトラーにたいする関係である。まずわれわれは、この両名が労働共同団の結成に尽力したの
は、ミュンヘン党本部から、とりわけエッサーの影響力を排除するためであり、この共同団の銚先をヒトラーに向けるた
めではなかったことを、確認しておかねばならない。このような両名の意図は、ゲッベルスがその日記の中で、エッサー
を「ヒトラーの災のもと」と呼び、労働共同団の活動と『国民社会主義通信』の刊行によって、「ヒトラーに、われわれ
の考えを分らせることができるであろう」と記し、またあらかじめシュトラッサーの意図を知らされていたゲッチング
の党指導者フォプケが、その手記に、「この独裁〔エッサーの専横な党運営の意——引用者〕に対抗しようとするこ
と、これが九月一〇日ヴェストファーレンのハーゲンに、グレーゴル・シュトラッサーが召集した会議の意図であつた」と記して
いることから明らかである。ゲッベルスとシュトラッサーが、ヒトラーに謀反の意図をもっていなかったことは、さらに
ゲッベルスがシュトラッサーあての書簡でハーゲン会議の模様を知らせたさい、「すべての出席者は、討議の中で、北部
・西部ドイツ大管区労働共同団は、決してミュンヘンに銚先を向けてはならないということ強調した」とわざわざ報告
していること、またこの両名が協力して作成した労働共同団規約の第四条には、共同団の結成と『国民社会主義通信』の
刊行とは、ともにヒトラーの承認を得ていると記載され、第一二条には、この共同団加入の大管区指導者は、ヒトラーの
指導下に活動するとうたわれていることからも確かめられる。

なおヒトラー自身が、労働共同団の活動に、当初は、危惧の念をいだいていなかったことも、附記されるべきであろう。
すなわちミュンヘン党本部のヒトラー事務局から党地方組織あてにだされた指示の中では、ゲッベルスが労働共同団の依
頼で刊行した『国民社会主義者の小abc』が全党員によって閲読され、また『国民社会主義通信』が大管区および支
部の指導者によって購読さるべきことが推奨されていたのである。

またわれわれは、バンベルク会議までのゲッベルスの日記の随所に、ヒトラーへの礼讃の辞が記されていることも見落

してはならない。ゲッベルスは、ヒトラーの『わが闘争』第一巻につき、かれの「政治的本能」に「すっかり感激してしまふ」^⑧とのべ、またこの書物を「引き裂かれるような緊張感」をもって読了したのち、ヒトラーは「半ば人で、半ば神か。本当のところキリストなのか。それともヨハネなのか」という感想を記している。この当時、ゲッベルスがなによりも願っていたのは、エッサー、シュトライヒャーたちをとびこして、ヒトラーとじかに接触し、自己の考えをかれに伝えることであった。^⑨それ故、ゲッベルスは、ヒトラーと会見できた時の喜びを、「わたくしは、全く幸せだ」と記し、かれを、「王者」「生れながらの護民官。未来の独裁者」とほめたたえている。

それでは以上の考察をふまえて、ゲッベルスが第二回ハノーヴァ会議の席上で、ヒトラーの党外追放を要求する発言を行なったのか否かの問題を、ここで検討してみよう。

なるほどハイバーは、第二回ハノーヴァ会議の席上におけるゲッベルスのヒトラー追放発言を否定はしているが、別の機会に同じ趣旨の発言を行なったらしいとの推測を下している。その根拠としてハイバーは、(一)シュトラッサー兄弟が、のちにしばしばかれのヒトラー追放発言を引合いにだしたこと、(二)第二回ハノーヴァ会議に近い時期に、ゲッベルスとヒトラーとの関係が悪化したことをあげている。^⑩しかし(一)については、シュトラッサー兄弟が、のちにゲッベルスと激しい対立関係にたつにいたったという事情を考慮に入れるべきであろうし、^⑪(二)に関しては、そのような根拠はなにもないといわねばならない。何故ならゲッベルスは、ヒトラーからの献辞つきの贈物を一九二五年のクリスマスの際に受取っており、それから一ヶ月ほどの間に、両者の関係の悪化を示すような事態はなにも感知されないからである。事実、ゲッベルスは二六年一月に入ってまもなく、ヒトラーをレーニンに代るべき二者択一の指導者として称揚する『レーニンかヒトラーか』と題する演説の原稿執筆を再開しており、^⑫また同年一月二〇日には、ヒトラーからの書簡到着を「大きな喜び」^⑬で迎えている。以上の根拠からわれわれは、ゲッベルス発言に関するハイバーの主張は支持できないといつて差支えない。

なるほどシルトは、ゲッベルスのヒトラー追放発言には態度を保留している。だが他方では、ゲッベルスが他の会

議参加者よりも早目にハノーヴァを辞去し、従って、ヒトラーの党首としての資格をめぐる討議には、部分的にしかな参加していないか、あるいは全く参加していなかった可能性があると指摘し、ゲッベルスが第二回ハノーヴァ会議に関する日記に、党首問題の討論の模様を全く記していないのは、このためであるとも主張している。たしかにゲッベルスは、この会議の翌日、グレーゴル・シュトラッサーに「昨晚、われわれが辞去したのち、ハノーヴァでは、なおどんなことが論議されたのか」と問いあわせている。ここで想起されるのが、マンヴェル、フレンケルのゲッベルス発言否認の理由である。この兩名は、ゲッベルスが実際にそのような発言を行なったのであれば、必ず日記の中でそれを自慢して書き記した筈だと主張している。^④この推察は、根拠のないものではない。何故ならゲッベルスは、バンベルク会議の席上でヒトラーの演説に幻滅を感じた時には、日記の中にヒトラーを「反動」と書き記しているからである。従って、シルトの態度保留は、慎重にすぎるといえることができるであろう。むしろかれが推察したように、ゲッベルスは、ヒトラーの党首としての資格をめぐる討議には参加していなかったのであり、それだからこそかれの日記には、この件に関する記載が全く欠けていたのではあるまいか。

それではつぎに、ゲッベルスとグレーゴル・シュトラッサーとの関係の悪化およびその原因に関する考察に筆をすすめることにしよう。

まずわれわれは、バンベルク会議以後、両者の友好関係にさしあたり変化のないことを、確認しておきたい。すなわちゲッベルスは、一九二六年三月六日附の日記に、「シュトラッサーは、申し分のない男だ」と記しており、他方でシュトラッサーも、三月末、ゲッベルスがヒトラーからミュンヘンで演説するよう招待された時、かれに「貴方がミュンヘンで演説するのは、嬉しいことだ」と書き送り、当地では慎重に振舞うようにと、好意的な助言をあたえている。

リースとシャイラーは、一九二六年八月以降、ゲッベルスとグレーゴル・シュトラッサーとの関係が悪化したと主張している。彼らがその根拠としてあげるのは、ゲッベルスが八月に『フェルキッシャー・ベオバハター』紙に発表した論説

である。リースとシャイラーによれば、この論説の中でゲッベルスは、シュトラッサーを先頭とする北部ドイツの党員たちを「革命家」ではないと呼び、ヒトラーの背後にたつことは、なんら「ダマクス」を意味するものではないと、自らの転向を釈明しているという^②。さらにリースは、ゲッベルス・シュトラッサー関係悪化の例証として、以下のようなゲッベルスの日記の内容を引用している。「シュトラッサーより来信。かれあてに反信。われわれ相互間の関係についての深刻な対立。だがこれは、解決がつくであろう」(二六年八月四日附)「シュトラッサーは、わたくしをひどく嫉妬している。ここからわたくしにたいする、かれの無作法で軽率な振舞いが説明できるのだ」(同九月二三日附)。

しかしゲッベルスとグレーゴル・シュトラッサーとの関係が、一九二六年八月以降、悪化したとみなすことには疑問がある。何故ならゲッベルスは、同年八月三日附の書簡で、ベルリン大管区指導者就任の件に関し、オットー・シュトラッサーに悩みを打明けて相談しており^③、他方でオットー・シュトラッサーの側も、九月一日附の書簡で、ゲッベルスとシュトラッサー兄弟間にわだかまる、すべての障害が除去かれ、「貴方が古くからの友情と信頼のうえにたつて、われわれと肩を並べてたかかうようになる」ことを期待すると書き送っているからである。さらにゲッベルスの日記には、以下のような記述がみえる。「一四日間の旅行。……多くの友人に、わたくしは会うことになるであろう。シュトラッサー」(グレーゴルのこと——引用者……と会うのが嬉しい)「(二六年一〇月五日附)」と。

以上の理由からわれわれは、ゲッベルスとグレーゴル・シュトラッサーとの関係が一九二六年八月以降、悪化したとするリースとシャイラーの主張を支持することができない。だがわれわれは、この時点で両者の間に少なくとも何かわだかまりが生じていたことは、認めねばならないであろう。それではこれは、何故、生じたのであろうか。バンベルク会議後のゲッベルスとヒトラーとの関係を考察してみることが、手掛りをあたえてくれそうである。

本稿第一章の末尾に要約しておいたように、一九六〇年以降の諸研究は、バンベルク会議後のある時期に、ゲッベルスがグレーゴル・シュトラッサーから離れ、ヒトラーのほうへ移行したと主張している。このうち、ゲッベルスの二六年四

月一三日附日記の中に、かれのヒトラーへの移行を読みとっているのは、ノークスとオーロウである。しかしこの兩名が、その根拠としてあげているものは、甚だ曖昧である。ノークスの場合、強いてそれを求めてみれば、バンベルク会議で南部ドイツの党員たちの自家用車に心を奪われたという、ゲッベルスの日和見主義という指摘の中にみいだすことができるであろう。オーロウの見解もこれに近い。かれは、ゲッベルスが四月上旬のミュンヘン滞在中にヒトラーから受けた手厚い待遇をあげ、「これらすべては、社会的・人間的劣等感についてのゲッベルスの鋭敏な感覚への香油であった」と主張している。だがゲッベルスのヒトラーへの移行の理由は、果してこの兩名の主張するような、かれの人間的弱点の中に求めることができるであろうか。

ここでわれわれは、バンベルク会議後における、ゲッベルスとヒトラーとの関係を全面的に洗い直して見る必要があるであろう。すでにわれわれは、この会議前におけるゲッベルスのヒトラーへの信奉を指摘しておいた。そしてかれは、このような傾倒を維持したまま、シュトラッサー側の主張にヒトラーの支持をとりつけ得るとの期待をいだいて、バンベルク会議に出席する。しかしこの楽観的な期待は、幻滅に変わる。かれは、この会議で、反ソヴェト政策の採用、王侯財産没収の否認、現行の党綱領の容認などをもちこんだヒトラーの演説を聞いた時の感想を以下のように記している。「わたくしは、打ちのめされたように感じた。ヒトラーとは何者か。反動なのか。……わたくしは、一言も発言できなかった。……わたくしの生涯で、もっともひどい失望だ。わたくしは、もはや心の底からヒトラーを信じない。恐ろしいことだ。わたくしから、心の支えが取りさられた」^⑧と。

この日記の箇所は、一九六〇年以降の研究においては、オットー・シュトラッサー派の主張を否認する根拠として取上げられるとともに、ゲッベルスがヒトラーへの信奉の完全な喪失にもかかわらず、のちにヒトラーのほうに移行したとされて、かれの日和見主義を確証する史料としても引用されてきた。だがわれわれは、この日記の記述を、かれのヒトラーへの信頼の全面的喪失を物語るものと受取ってよいのであろうか。何故ならわれわれは、バンベルク会議の五日後に、か

れがケーニヒスベルクで『レーニンかヒトラーか』と題する演説を行なったことを想いだすからである。ゲッベルスは、この演説の中で、ヒトラーだけが真の民族共同体を樹立することができる^⑩、かれを礼賛している。しかもこの演説会場の模様を記した日記の中には、つぎのような一節がみえる。「わたくしは、三時間、演説した。息づまるような沈黙、ついで賛同の叫び^⑪」と。かれは、ケーニヒスベルクで心にもないヒトラー礼賛の芝居をうったのであろうか。

このケーニヒスベルク演説は、ゲッベルスがヒトラーへの傾倒の念を完全に喪失してしまったのではないことを物語っている。われわれは、バンベルク会議の席上で、かれがヒトラー演説にたいするフェーダー、シュトライヒャー、エッサーなどのヒトラー側近の反応に気をくばっていたこと^⑫、およびこの会議の模様を記した日記の末尾に以下のような記述があることに注意しよう。すなわち「シュトラッサーとわたくしは、ヒトラーのもとにゆき、かれと徹底的に話しあうつもりである。かれは、悪党どもに束縛されてはならないのだ^⑬」と。つまりゲッベルスは、直接、ヒトラーとの会談を希望し、あわせてかれの側近に非難を向けている。またわれわれは、一九二六年二月二日、グレーゴル・シュトラッサーの要請で開催された第三回ハノーヴァア会議^⑭の席上で、「ミュンヘン側」に一時的な勝利を認め、その間に労働共同団の力を強化する決議が下されたが、その決議にゲッベルスが賛成していることにも注意しよう。ここに記されている「ミュンヘン側」とは、ヒトラーではなく、おそらくエッサーやシュトライヒャーを指しているのであろう。何故なら、二六年二月二四日附の日記には、かれがシュトライヒャーを非難する手紙をヒトラーに書き送ったこと、また「側近たち」がヒトラーを精力的に煽動するであろうとの憂慮が記されているからである。これらのことは、いずれもゲッベルスがヒトラーへの信奉を完全に喪失したのではなく、かれにやはり希望をつないでいることを物語っている。

そればかりではない。かれは、ヒトラーへの傾倒を強め始める。前述の一九二六年二月二四日の日記には、ゲッベルスが「オレンジ戦争」と題する論説を執筆したと記されている。そしてかれは、この論説の中で、イタリアとの同盟のために、南部ティロルのドイツ系住民の復帰の願望を犠牲にすべきことを主張して、ヒトラーの具体的な政策に歩みより始め

ている。さらに二六年三月一三日附の日記には、ヒトラーの小冊子『南部テイロル問題とドイツ同盟問題』について、以下のような評価を下していたことがみえる。「非常に明確で、堂々とした小冊子である。かれは、まさしく頼もしい人物であり、支配者だ^⑩」。

だがわれわれは、一九二六年四月一三日附の日記をこそ、もっとも重視しなければならない。かれは、この日附の日記に、四月九日にヒトラーと会談した時の感想を以下のように記している。「われわれは、質問をする。かれの回答は、すばらしい。わたくしは、かれを愛する。社会問題。全く新しい洞察である。かれは、すべてを考えぬいたのだ。かれの理想は、集産主義と個人主義との混合だ。土地および地上と地下にあるものは、民族の所有となる。生産に関しては、創造的なものは、個人主義的に経営され、コンツェルン、トラスト、完成品生産、交通などは、社会化される。……わたくしは、かれにすっかり満足した。……このような発酵する精神の持ち主ならば、わたくしの指導者となりうる。わたくしは、この偉大な人物に、政治的天才に頭を下げる^⑪」と。

ノークスとオーロウ、さらにケルも、この四月一三日附日記には、大きな注意をはらっている。だが彼らは、ここに引用されている経済問題解決へのヒトラーの見解が、そのままゲッベルスののちの著述『ナチンゾチ』に採用されていること^⑫に気づいてはいない。ゲッベルスがヒトラーの見解を『ナチンゾチ』の中に採用したことは、すでに四月九日の時点で、かれが自らの社会主義的見解とヒトラーの見解とは両立しようとみなしたことを物語っている。われわれは、ゲッベルスがヒトラーに「すっかり満足し」、再びバンベルク会議前のように、ヒトラーへの傾倒に立戻るにあたっては、経済問題に関し、直接、ヒトラーに聞きあわせ、かれとの意見の一致をふまえていたことを見落してはならない。ただしゲッベルスがヒトラーの見解に賛意を表したことをもって、かれの「ダマスクス」と解釈してはならないであろう。何故なら、本稿第二章で確認しておいたように、ゲッベルスのいわゆる社会主義思想は、バンベルク会議前後においても変化がなく、またこの会議前のかれの思想的枠組の中ならば、その大枠を変えることなしに、ヒトラーの上述の方針は受けいれること

ができると考えられるからである。ましてゲッベルスのヒトラーへの移行を、かれの人格的弱さの中にのみ求めるノークスとオーロウの主張は、全く支持できないといわなければならない。

この四月一三日附の日記は、ゲッベルスのヒトラーへの傾倒が確実に読みとれるという点で、かなり決定的な日附ではある。だがわれわれは、かれのヒトラーへの移行を四月上旬～七月末と主張するハイバーの見解も、ハイバーとは別箇な角度からみて、意味のある時期設定といえることができる。何故なら、丁度、六月～八月頃からゲッベルスとグレーゴルスとシュトラッサーとの間に、わだかまりの発生を窺わせる記述が、かれの日記に登場してくるからである。この期間に、なにか新しい事態が進行していたのであろうか。

その新しい事態とは、グレーゴルスとシュトラッサーとヒトラーとの関係悪化のことであろうか。ここでバンベルク会議後の両者の関係を考察してみよう。すでに指摘したように、一九二六年二月二一日開催の第三回バンベルク会議において、労働共同団の活動を強化し、社会主義のために尽力することが決議されていた。だが三月五日にはシュトラッサーは、ヒトラーとの約束にもとづいてかれの綱領草案を回収したいとの要請状を、労働共同団関係の黨員に発送している^④。ついで五月二二日にミュンヘンに黨員総会が開催され、新しい党規約が制定された時、その第二条には旧来の二五カ条綱領の不変更がうたわれていた^⑤。なるほどオットー・シュトラッサーは、いま一度、労働共同団の会議を開こうとした形跡がある^⑥。しかし会議は、もはや開催されなかった。それどころか、七月一日には党地方組織の大綱が制定され、個々の大管区の横断的結合が禁止されるが、この方針が予め伝えられていたためであろうか、同日附で労働共同団それ自身が解散されてしまうのである^⑦。

だがこれらの事態を、グレーゴルスとシュトラッサーとヒトラーとの関係悪化の徴候とみなしたり、また前者の後者への一方的な屈服と解釈してはならない。一九二六年三月上旬、シュトラッサーが自動車事故で重傷を負った際、同月下旬にはヒトラーは親しくかれを見舞い、その時、再度の訪問をさえ約束している^⑧。そして四月にはミュンヘン党本部からエッ

サーが退き、九月にはシュトラッサーが全国宣伝委員長という資格で党本部入りを果している。このような経過をみるならば、ヒトラーはバンベルク会議においては、「パイオニア」の立場にも「革命家」の立場にも加担しなかったのであり、かれは双方の党員を必要としていたという、オーロウの指摘は当を得たものといわねばならない。ヒトラーがシュトラッサーを全国宣伝委員長に任命したことは、かれがシュトラッサーの思想を危険視していなかったこと、またシュトラッサー自身がヒトラーの設定した軌道の中で活動することに異存がなかったことを物語っている。この点で、ヒトラーは自己の絶対的指導権を脅やかされぬ限り、党綱領の解釈をめぐる多義性を容認するつもりでいたという、ニオマルケイの解釈は的はずれてはいないといえよう。

バンベルク会議以後、ゲッベルスもグレーゴル・シュトラッサーも、ヒトラー指導下で活躍することには、やぶさかではなかった。それにもかかわらず、この両者の間になにか疎隔を思わせる事態が生じた原因として、われわれは、ここでルール大管区の運営をめぐる、当地の指導者間に生じた対立に目を転じてみる必要がある。

ラインラント・北部とヴェストファーレンの两大管区を統合してルール大管区を設立するための協議は、おそくとも一九二五年一二月月中旬から開始されている。グレーゴル・シュトラッサーは、ゲッベルス、カウフマンたちと協力して、この計画を推進し、翌年三月六～七日エッセンにルール大管区の創立会議を開催した。そしてこの大管区は、合議制による指導体制をとることになり、ゲッベルス、カウフマン、プフェファーの三名が大管区指導者に就任した。^⑤しかしこの大管区の運営は、その合議的な指導体制のために、かえって内部紛争の激化を招くにいった。

ゲッベルスは、ルール大管区には「煽動と陰謀」が渦巻いていると指摘している。^⑥かれに「煽動と陰謀」と映じたものは、この大管区における下部の管区指導者たちがカウフマンと共謀して、合議的指導体制を廃止し、一人制の大管区指導者の就任を策動したと関係がある。ゲッベルスは、この動きを「わたくしには、ひどくたまらないことだ」と記し、かれ自身が大管区指導者の候補として話題にもされなかった模様を「悪霊がわれわれの大管区を歩き廻っている」と歎い

ている。^⑨かれは、この大管区において管区指導者たちをもまきこんだ大管区指導者同士の反目が深まるにつれて、自らの孤立を感じ始めたらしい。かれは記している——「ヒトラーがまもなくやってくる筈だ。わたくしは、かれに一切を話すべきであろうか」と。このようにかれはヒトラーの手による解決に期待し始める。

ひきつづいてかれの日記には、つぎのような注目すべき記述がみえる。「[大管区指導者の決定は——引用者] まだ分らない。来週にはヒトラーが解決する筈だ」と。そしてかれは、自らの今後の進路として、ベルリン大管区に、それとも党の総書記としてミュンヘンに赴任するかという二者択一をあげたのち、「シュトラッサーは、わたくしがミュンヘンと妥協したと推測している」とのべ、またその二日後にかれは、「この組織は、わたくしにはたまらない。……ヒトラーがわたくしをミュンヘンに引きぬいてくれるとよいのだが。その時には、一切のくだらぬことから脱れることができるのだが。いまや万事は、ヒトラーの決定にかかっている」と記している。ゲッベルスが期待をかけたヒトラーは、一九二六年六月一四〜二一日にかけてルール大管区を訪問する。そしてかれの滞在中に、グレーゴル・シュトラッサーをもまじえて、当地の指導者間に協議がもたれ、六月二〇日にはヒトラーの裁定によってカウフマンが大管区指導者に就任することとなった。^⑩

以上の経過からわれわれは、ゲッベルスがルール大管区指導者の決定をめぐる内紛の中で、グレーゴル・シュトラッサーを含めて、この大管区関係の旧知の指導者たちに疎隔と嫌悪を感じ、今後の進路をヒトラーの選択に期待し、かれへの依存を深めるにいたったと主張することができる。そしてこの事態こそが、ゲッベルスとシュトラッサーとの関係のひび割れの端緒となったと考えられる。このような脈絡の中で、われわれは、かれの日記のつぎのような一節に注目しておきたい。「わたくしのダマスクスが、運動の内部で語られている。わたくしが、ヒトラーとミュンヘンに屈服したというのだ。この噂の吹聴者は、シュトラッサー第一と第二[シュトラッサー兄弟を指すと思われる——引用者]、張本人は……カウフマンだ」。

それにしてもゲッベルスとグレーゴル・シュトラッサーとの関係悪化の端緒には、イデオロギー問題での対立が介在していたのであろうか。なるほどゲッベルスは、一九二六年七月中旬～下旬にかけて、再びヒトラーを訪問した時、その日記に、「ヒトラーが語り始めた。社会問題、あの時ミュンヘンで開陳した考えだ。だがやはり新鮮で、説得力をもち、適切な例で裏づけられている。まさしく、この人物になら奉仕することができ」^⑩とのべ、また「わたくしは、かれにすっかり結びつけられてしまったようだ。いまや疑惑の念もすっかり消えさった」と記して、イデオロギー的にもヒトラーと一致し、人格的にも帰依できると考えている。

だがこのことは、ゲッベルスがイデオロギー面で、グレーゴル・シュトラッサーから離反し始めたことを意味するものではない。バンベルク会議前の時期においては、両者の主張は基本的には一致していた。^⑪ またわれわれは、本稿第二章においてゲッベルスの思想が、バンベルク会議以降も一貫しているのを確認しておいた。このことを念頭において、両者の関係悪化を考察してみる時、それはイデオロギー問題が原因ではないといわねばならない。両者の関係悪化の端緒には、ルール大管区の指導権をめぐる紛糾が介在しており、これがゲッベルスのヒトラーへの移行を促進したといえるのである。さきにわれわれは、かれのヒトラーへの移行の時期を考えるにあたって、一九二六年四月上旬～七月末と設定するのは意味があることだと指摘しておいた。それは、六月下旬に決着がつくルール大管区の運営上の紛糾と、それに絡むゲッベルスの孤立感が、かれをシュトラッサーを含む旧知の黨員から疎隔させ、ヒトラーへの傾斜を深めさせたという経過があるからである。ただし、ここでヒトラーへの移行という概念には、限定を加えておく必要がある。ゲッベルスは、バンベルク会議前においても、ヒトラーの傾倒者であった。そしてかれは、この会議の席上における一時的な動揺のうちに、再びヒトラーへの熱烈な傾倒へとたち帰った。ただし、その再傾倒の場合には、かれのシュトラッサーからの独立の始まりを随伴していたのであると。

⑩ TgB v. 21. Aug. 1925.

⑪ G. Strasser an Goebbels v. 29. Aug. 1925, BAK NS 1 340/404.

Goebbels an G. Strasser v. 31. Aug. 1925, *ibid.*, 340/216.

- ② Statuten der Arbeitgemeinschaft der nord- und westdeutschen Gaue der NSDAP v. 9. Okt. 1925, in *Nationalsozialismus und Revolution: Ursprung und Geschichte der NSDAP in Hamburg 1922-1933: Dokumente*, hrsg. v. Werner Jochemann (Frankfurt/M., 1963), Dok. Nr. 67, 217-178 頁を参照せよ。
- ③ *Tgb* v. 21. Aug. 1925.

- ④ Hermann Fobke, Aus der nationalsozialistischen Bewegung: Bericht über die Gründung der Arbeitgemeinschaft der nord- und westdeutschen Gaue der NSDAP, *Jm. Dok.*, Nr. 66.
- ⑤ Goebbels an G. Strasser v. 11. Sept. 1925, BAK NS 1 340/399.

⑥ *Jm. Dok.*, Nr. 67.

- ⑦ Kanzlei von Adolf Hitler an die Landes- und Ortsgruppenleitung der Nationalsozialistischen Arbeiterpartei v. 11. Dez. 1925, in *Führer befehl...: Selbstzeugnisse aus der Kampfbücherei der NSDAP: Dokumentation und Analyse*, hrsg. v. Albrecht Tyrell (Düsseldorf, 1969), Dok. Nr. 47, 217-178 頁を参照せよ。
- ⑧ *Tgb* v. 29. Aug. 1925.
- ⑨ *Tgb* v. 14. Okt. 1925.
- ⑩ *Tgb* v. 12. u. 19. Okt. 1925.
- ⑪ *Tgb* v. 6. Nov. 1925.
- ⑫ Heiber, *op. cit.*, S. 51.

⑬ 同じ理由から「ゲッベルスが「ヒトラーは、社会主義を裏切った」云々の発言はしたらしい」というライマンの主張も支持すべきなり。ライマンの根拠は、ローゼンベルグの一九三九年三月一日附の日記 (*Das politische Tagebuch Rosenbergs 1934/35 und 1939/40*, hrsg. v. Hans-

Günther Seraphim [dtv Dokumente, 1964], S. 82) にあるが、第三帝国の時期にはローゼンベルグがライマンと対立関係にあった云々の事情を考慮しなくてはならない。

- ⑭ *Tgb* v. 29. Dez. 1925.
- ⑮ *Tgb* v. 6. Jan. 1926.
- ⑯ *Tgb* v. 20. Jan. 1926.
- ⑰ Schild, *op. cit.*, S. 153, Anm. 2.
- ⑱ Goebbels an G. Strasser v. 25. Jan. 1926, BAK NS 1 340/171.
- ⑲ 前掲雑誌「HÖYER」。
- ⑳ *Tgb* v. 6. März 1926.

- ㉑ G. Strasser an Goebbels v. 1. April 1926, BAK NS 1 340/154.
- ㉒ Riess, *op. cit.*, S. 43, ナンバー「前掲雑誌」二〇二〜二〇六頁を参照せよ。
- ㉓ Riess, *op. cit.*, S. 43, ナンバー「八月四日附の日記」から「深刻な」ernst を「最初の」erst と「関係」Verhältnis を「関係」を「振舞」Verhalten と誤読してあることに九月十三日附日記を九月二〇日付の誤読してある。 *Tgb* v. 4. Aug. u. 23. Sept. 1926 を参照せよ。

- ㉔ Goebbels an O. Strasser v. 3. Aug. 1926, BAK NS 1 340/73.
- ㉕ O. Strasser an Goebbels v. 11. Sept. 1926, *ibid.*, 340/145.
- ㉖ *Tgb* v. 5. Okt. 1926.
- ㉗ Orlov, *op. cit.*, p. 72.
- ㉘ *Tgb* v. 11. Febr. 1926.
- ㉙ *Tgb* v. 15. Febr. 1926.
- ㉚ *ibid.* Lenin od. Hitler?, S. 22 を参照せよ。
- ㉛ *Tgb* v. 22. Febr. 1926.
- ㉜ *Tgb* v. 15. Febr. 1926.

- ② Bernhard Rust an Karl Kaufmann v. 18. Febr. 1926, *Jm. Dok.*, Nr. 73.
- ③ *Tgb* v. 22. Febr. 1926.
- ④⑤ *Tgb* v. 24. Febr. 1926.
- ⑥ Der Apfelsienkrieg, *NS Briefe* v. 15. März 1926.
- ⑦ *Tgb* v. 13. März 1926.
- ⑧ *Tgb* v. 13. April 1926.
- ⑨ Noakes, *op. cit.*, p. 31; Orlow, *op. cit.*, p. 72; Käte, *op. cit.*, p. 101.
- ⑩ *Der Nazi-Sozi*, S. 15. 本題「〇」
- ⑪ G. Strasser an die Mitglieder der Arbeitergemeinschaft v. 5. März 1926, *Jm. Dok.*, Nr. 74.
- ⑫ Sitzung des Nationalsozialistischen Deutschen Arbeitervereins e. V., § 2, BAK NS 26/80.
- ⑬ O. Strasser an Goebbels v. 29. Juni 1926, BAK NS I 340/91.
- ⑭ Richtlinien für Gaue und Ortsgruppen der Nationalsozialistischen Deutschen Arbeiter-Partei, *Ty. Dok.*, Nr. 83a.
- ⑮ G. Strasser, Rückblick und Ausblick, *NS Briefe* v. 1. Okt. 1926.
- ⑯ G. Strasser an Goebbels v. 29. März 1926, BAK NS I 340/156.
- ⑰ *Ty. Dok.*, 150a.
- ⑱ Orlow, *op. cit.*, pp. 69 & 52.
- ⑲ Die große Gautagung des Gaues Rhein-Ruhr am 6. und 7. März 1926 in Essen, BAK NS 26/136; *Völkischer Beobachter* v. 17. März 1926. 本稿「国民的」及び G. Strasser, Zehn 6. und 7. März, *NS Briefe* v. 1. März 1926 を参照せよ。
- ⑳ *Tgb* v. 4. Juni 1926.
- ㉑ *Tgb* v. 5. u. 7. Juni 1926.
- ㉒ *Tgb* v. 7. Juni 1926.
- ㉓⑳ *Tgb* v. 10. Juni 1926.
- ㉔ *Tgb* v. 12. Juni 1926.
- ㉕ *Tgb* v. 19. u. 21. Juni 1926.
- ㉖ *Tgb* v. 25. Aug. 1926.
- ㉗ *Tgb* v. 23. Juli 1926.
- ㉘ *Tgb* v. 25. Juli 1926.
- ㉙ 「この点については、前掲拙稿『きよび同』「レヴォルーション」に於ける「国民的社會主義」『奈良女子大学文学部研究年報』一八号・一九七五年を参照せよ。

第四章 ゲッベルスのシュトラッサー兄弟との決裂

この章では、ヒトラーによるゲッベルスのベルリン大管区指導者への任命の動機、ならびにゲッベルスとシュトラッサー兄弟との決裂の原因・時期について考察してみたい。

まずヒトラーのゲッベルス任命の動機に関する、ケルの主張から取上げてみよう。すでに紹介したように、ケルは、ゲ

ツベルス任命の理由の一つは、かれの強い親労働者の傾向がコムニスト勢力の強固なベルリンには適切と判断されたからと主張している。だがその際、ケルの根拠とする史料は、ベルリンの党組織が労働者の獲得に従事している状況をミュンヘン党本部に伝える報告のみであるという、不十分なものにすぎない^①。しかもケルは、ゲッベルスのベルリン大管区赴任の件を、前述したルール大管区における大管区指導者決定をめぐる紛糾と関連させて考察する視点を欠いている。ゲッベルスは、ルール大管区の紛糾が頂点に達した頃の日記に、ベルリンの党員は「わたくしが救済者としてベルリンにゆくことを欲している」と記している。しかもかれのベルリン大管区指導者就任によせる当地の党員たちの希望は、グレーゴル・シュトラッサーの賛成をも得て、一九二六年六月はじめ頃には、ヒトラーのもとに伝達されていた^②。

ベルリン大管区においては、一九二六年三月に突撃隊が結成されて以来、大管区指導者シュランゲと突撃隊長ダリュゲとの間に、運動の方向をめぐる対立が激化するようになっていた。しかもシュランゲに代り大管区指導者代理に就任したシュミーディッケも、当地の紛争を収拾することができず、そのためこの大管区の活動は、麻痺寸前の状態に陥るにいたった^③。そしてこの紛糾の中から、正式の大管区指導者の任命問題が激しく争われるようになり、党員の間には、ピストルによる決闘の申し出をも含む険悪な事態がもたらされた^④。ゲッベルスがベルリンの党組織を再建できる大管区指導者として、その赴任が当地の党員の間から、強く期待されるようになるのは、以上のような状況を背景としていた。この点で、ベルリン党組織の内紛が、ゲッベルスの大管区指導者任命への真の動機であったというプロッシャートの主張は、当を得たものといわなければならない。

ヒトラーは、はじめ合議的指導体制をとって発足したルール大管区の三人の元大管区指導者のうち、カウフマンを一九二六年六月に同大管区の指導者に任命し、一月にはプフェファアを突撃隊の全国隊長に任命した^⑤。そして一月一日には、従来のベルリン大管区を改組したうえで、その指導者に最後の一人ゲッベルスが任命されるようになる^⑥。それ故、ヒトラーは、ルール大管区に生じた紛争を、最終的にはベルリン大管区において解決したといえるのである。以上のような

経過は、ヒトラーによるゲッベルスのベルリン大管区指導者任命への動機を、シュトラッサー兄弟の活動に打撃をあたえるため(ブロック)とか、この兄弟のイデオロギー攻勢に備えるため(ホルン)と説明するような主張の成立が困難であることを物語っている。

ところでゲッベルスとシュトラッサーとの関係悪化の時期について、キューンル、ニオマルケイは、ゲッベルスのベルリン大管区指導者への就任以後と主張している。だがこの兩名は、その根拠をあげておらず、しかもこの時期画定は余りにも無限定といわなければならぬ。少なくとも、かれのベルリン赴任直後、または数週間後に両者の関係が悪化したとは、いまのところ立証しにくいのである。

ところが一九二七年六月一七日、ベルリンの有力党員ホルツがヒトラーに即座のベルリン来訪を要請した書簡には、つぎのような注目すべき一節がみえる——「貴下が当地に來ないならば、ベルリンの運動は崩壊してしまうような危険な事態が起っている。それというのも、ゲッベルスとシュトラッサーとの対立が原因である。この問題には、大至急、決着がつけられねばならない」と。つづけてホルツは、近く創刊予定のゲッベルス発行の新聞『攻撃』が、シュトラッサー発行の『ベルリン労働者新聞』Berliner Arbeiterzeitungの円滑な続刊を危うくするとの憂慮をあげ、ヒトラーに事態解決にのりだすよう懇願している^⑩。このホルツの書簡から、ベルリンの党を崩壊寸前の危機にまで追いこんだゲッベルス—シュトラッサー対立が、『攻撃』の創刊問題と絡んでいたことを読みとることができる。

だが『攻撃』創刊をめぐる両者の対立の詳細な経過については、なお今日、真相にはいたり得ない。何故なら、双方の当事者であるオットー—シュトラッサーもゲッベルスも、その回想録においては、この問題に簡単にふれているにすぎないからである。なるほどベルリンの党機関紙としては、すでに一九二六年三月以降、シュトラッサー兄弟によって『ベルリン労働者新聞』が刊行されていた。それにもかかわらず、ゲッベルスがあえて『攻撃』の刊行にふみきつたのは、ベルリンの党が二七年五月以降、警察当局により活動禁止の処分にあされたので、その結果生ずる党活動の衰退を喰いとめる

ためであったと、一般には説かれてきている。この新聞の初代編輯長であったリップルトも、ゲッベルスが『攻撃』刊行を思いついたのは、党活動禁止以後であったと回想している。¹²しかしゲッベルス自身は、党活動禁止前に、すでに独自の新聞の刊行を計画していたとべているのである。¹³

いづれにせよ、かれは、一九二七年六月一五日前には、独自の新聞を、それも「中立的」な新聞として刊行することにつきヒトラーの承諾を取りつけていた。何故ならグレーゴル・シュトラッサーが六月一五日附の書簡の中で、「中立的」な新聞としてゲッベルスの新聞刊行を認めるといふヒトラーの決定に苦情を申したてているからである。しかもかれは同じ書簡の中で、六月一〇日にゲッベルスがベルリンの有力党員の会議で、かれを甚だしく誹謗する発言を行なったとのべ、この件につきヒトラーの手による解決を要請している。¹⁴

またこの頃、ゲッベルスとオットー・シュトラッサーとの関係も決裂状態を迎えていた。ことのおこりは、シュトラッサー系統の新聞にルール大管区の党員コッホが「人種混合の結果」と題する論説を発表したことにあつた。ゲッベルスは、この論説の実際の執筆者をオットー・シュトラッサーと推測し、しかもその内容を自らの人格への甚だしい侮辱とみなして激怒した。なるほどこの一件は、一九二七年四月末、コッホ自身の否認により、一時、解決へ向かうかかみえた。しかしゲッベルスが、六月四日ベルリンの党員シュタインテルから、この件について新しい情報を得ると、事態は一層の紛糾を迎えるようになる。すなわちシュタインテルによると、問題の論説は、大管区指導者としてのゲッベルスの権威を掘りくずすために、二人のベルリンの党員がオットー・シュトラッサーの了承のもとに執筆し、コッホの署名を得て発表されたというのであつた。ゲッベルスは、この情報をただちにヒトラーに伝えるとともに、オットー側の党員によって、ベルリンの新聞にヒトラー・ゲッベルス対立という噂が流されていることをも報告し、シュトラッサーたちの策謀にヒトラーが強い態度を取るよう要請した。¹⁵

ひきつづいてゲッベルスは、一九二七年六月一〇日、ベルリンの有力党員その他一五名を集めて会議を開いた。しかし

その模様は、グレーゴル・シュトラッサーに漏洩するにいたり、かれは、この会議の内容をミュンヘン党本部に伝えるとともに、ヒトラーないし党本部の調査・仲裁委員会が解決にのりだすよう要請した。^⑰シュトラッサーの得た情報によると、当日の会議では、ゲッベルスが、コッホ論説は、かれをベルリンから追放するためのオットーの策謀と断定し、またその他の会議出席者たちから、シュトラッサー兄弟の日常の行動に激しい非難が浴せられたという。^⑱これにたいしグレーゴル・シュトラッサーは、当日の会議の論点を逐一、否認する文章を起草して反論するにいたり、かれとゲッベルスとの間には、一九二七年六月一二日～一五日にかけて、非難の応酬の書簡がとりかわされ、事態は険悪の度を加えた。^⑲

一九二七年六月二〇日～二一日にかけて、調査・仲裁委員会議長ハイネマン、ヘスの同席のもと、ヒトラーとゲッベルス間に会談がもたれ、その席上、(一)ヒトラー自身が事態の解決にあたる、(二)ヒトラーは、党中央機関紙上で、ヒトラー・ゲッベルス対立の噂さを否定する、(三)『攻撃』の刊行は、エーア出版社がひきうける、ということが決定され、事態は一応の落着をみるにいたった。^⑳

ライマンは、この決定をゲッベルスに一方的に有利なものと解釈している。かれによれば、『攻撃』の刊行をミュンヘンの党出版社エーアがひきうけることは、ベルリンの党機関紙『ベルリン労働者新聞』の威信を傷つけることになるので、この決定はシュトラッサー兄弟の敗北を意味し、また一九二七年六月二五日附『フェルキッシュャー・ベオバハター』紙上で、ヒトラー自身が、ヒトラー・ゲッベルス対立の噂さを否定したことは、かれによるゲッベルスの再信任を告げるものであったという。^㉑

だが六月二〇日～二一日の決定を、ライマンのように解釈することはできない。何故なら、『攻撃』紙は、実際には攻撃出版社という独自の出版社から刊行され、これにエーア出版社とベルリン大管区が参加するとされたのであり、この決定によって『ベルリン労働者新聞』の地位に変更があったわけではないからである。またオットー・シュトラッサーやコッホの党外追放という事態も起らなかった。このような経過は、ヒトラーがゲッベルスをベルリン大管区指導者に任命し

た動機についてのブロック、ホルン説の当否にかかわってくる。もしこの兩名の主張が正しければ、ヒトラーは、ゲッベルス・シュトラッサー対立を好機として、シュトラッサー兄弟に思い切った措置を取ったであろう。だがそのような措置は、講じられなかったものであり、しかも一九二八年一月にはヒトラーは、グレーゴル・シュトラッサーを全国組織局長という要職に任命している^⑧。このことは、ヒトラーがやはりかれを必要としていたことを物語っている。

だが一九二七年六月二〇日〜二一日の決定をもってしても、ゲッベルスとシュトラッサー兄弟との関係は、もとに復やなかった。七月四日の『攻撃』創刊以来、ヘルリンの街頭では、両派の新聞の販売合戦が実力による妨害をもまじえながら、熾烈化してゆく。両者の関係は、この年の七月以降、ついに決裂するにいたったといえることができる。

- ① Kele, *op. cit.*, p. 104.
- ② *Tgö* v. 10. Juni 1926.
- ③ Erich Schmiedicke an Goebbels v. 16. Okt. 1926, BAK Sammlung Schmiedicke (資料集) 199a.
- ④ Brief Gevers betr. Führungsamt F Nr. 26 786, Schr. d. Osaf v. 12. 10. 34, *ibid.*, 199a.
- ⑤ Reinhold Muchow, Situations-Bericht Oktober 1926, in Die Anfänge der Berliner NSDAP 1926/27: Dokumentation, Nr. 5, hrsg. v. Martin Broszart, *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, 8. Jg., 1960.
- ⑥ Nachtrag zum Lagebericht der N.S.D.A.P. zu Spezialia 248, BAK Sig. Sch., 199a; Schmiedicke an Goebbels v. 28. Okt. 1926, *ibid.*, 199a.
- ⑦ Broszart, *op. cit.*, S. 89.
- ⑧ *Tr. Dok.*, Nr. 150a.
- ⑨ *VB* v. 28. Okt. 1926.
- ⑩ E. Holtz an Hitler v. 17. Juni 1927, *Hb. Dok.*, Nr. 16. 〱〱
- ⑪ 編輯のナチズム日記の巻末には、ヒトラー蒐集の史料を附録として掲載されている。資料の名称を *Hb. Dok.* 資料集とす。
- ⑫ O. Strasser, *Hitler u. Ich*, S. 122/123; Goebbels, *Kampf um Berlin: Der Anfang* (München, 1934), S. 187 以下。
- ⑬ Julius Lippert, Vorwort, S. 8, in Hans-Georg Rahm, *Der Angriff 1927-1930: Der nationalsozialistische Typ der Kampfzeitung* (Phil. Diss., Universität Berlin, 1988).
- ⑭ *Kampf um Berlin*, S. 187. ローレンツの「ヒトラーのナチズムの歴史」は、ヒトラーの日記の断片を基に、その歴史を加えている。また Oron J. Hale, *The Captive Press in the Third Reich* (Princeton, 1964); Ernst K. Bramsted, *Goebbels and National Socialist Propaganda 1925-1945* (Michigan, 1965) 参照。
- ⑮ G. Strasser an Hess v. 15. Juni 1927, *Hb. Dok.*, Nr. 10.
- ⑯ Erich Koch an Goebbels v. 26. April 1927, *ibid.*, Nr. 7.
- ⑰ Goebbels an Hitler v. 5. Juni 1927, *ibid.*, Nr. 8.
- ⑱ G. Strasser an Hess v. 18. Juni 1927, *ibid.*, Nr. 12.

- ①② Protokoll, *ibid.*, Nr. 13.
- ①③ G. Strasser, Zusammenstellung der in der Funktionärsetzung vom Freitag, den 10. Juni 1927 erhobenen Angriffe und deren Erwidierung, *ibid.*, Nr. 14.
- ②④ Vortrag, *ibid.*, Nr. 17.
- ①④ *Ibid.*
- ②⑤ Reimann, *op. cit.*, S. 106/107.
- ③⑥ *Hb. Dok.*, Nr. 17, Anm. 3.
- ④⑦ *Tr. Dok.*, Nr. 150a.

おわりに

以上の記述においてわれわれは、まずゲッベルス像の成立・継承・修正の過程を考察し、ついで修正の歩みの中で生じてきた諸見解の対立に批判と検討を加え、ゲッベルス像の真相に迫るべく努力してきた。だがいま一つだけ説明すべき問題が残されている。それは、ゲッベルスとシュトラッサー兄弟との関係が、何故、コッホ論説の発表と『攻撃』創刊計画とを契機に急速に険悪化したのか、という問である。

ゲッベルス・シュトラッサー対立の奥深い原因については、ケルは分らないとのべて探究の努力を断念しており、ハイパーもこれについてはなにもふれていない。だがわれわれは、ここでプロッシャートが指摘した両者の活動様式の相違に注目して見る必要がある。かれによると、シュトラッサー側、とくにオットーは、イデオロギーを前面に押しだして運動を前進させようとしたのにたいし、ゲッベルスは、過激な行動主義アクティヴィスムに力点をおき、これを運動の生命源として重視したという。②このプロッシャートの示唆をふまえて、ゲッベルスのベルリン赴任後における両派の活動様式を、綿密に検討してみれば、われわれは、ゲッベルス・シュトラッサー対立の奥深い原因に迫ることができるかもしれない。

① Kele *op. cit.*, p. 105.

② Broszart, *op. cit.*, S. 90/91.

——本稿は、昭和五一年度文部省科学研究費（総合研究A）〔研究代表者・同志社大学文学部大下尚一教授〕による成果の一部である——

Revision der Goebbels-Interpretation

von

Mikio Nakamura

Die Männer der "Kampfgemeinschaft der revolutionären Nationalsozialisten" unter der Führung Otto Strassers, der wegen des Gegensatzes zu Hitler im Jahre 1930 aus der NSDAP ausgetreten war, behaupteten in ihren in den dreißiger und vierziger Jahren erschienenen Werken, daß Joseph Goebbels ein prinzipienloser Opportunist und Verräter der linken Strömung innerhalb der NSDAP gewesen sei. Die Forschungen über den Nationalsozialismus, von den dreißiger bis zu den fünfziger Jahren, folgten kritiklos dieser Meinung. Diese Interpretation ist jedoch durch die neueren Forschungen nach dem Jahre 1960 scharf kritisiert worden und man hat neuerdings erkannt, daß Goebbels der führende Mann einer anderen radikalen Strömung war, die neben den Brüdern Strasser bestand, die bisher als die Leiter der ganzen nationalsozialistischen Linken angesehen wurden.

Die große Bedeutung der Tätigkeit von Goebbels in der "Kampfzeit" der NSDAP ist, im allgemeinen, seiner Rolle als fähigem Propagandisten und Redner zugeschrieben worden. Man muß jedoch vielmehr seine soziale Funktion im Aufstieg der nationalsozialistischen Bewegung beachten, da seine radikale und arbeiterfreundliche Orientierung einen beachtlichen Beitrag zur Erweiterung der Massenbasis der NSDAP geleistet hat. Die vorliegende Arbeit ist die Vorbereitung für eine Revision der Goebbels-Interpretation.

Concerning the formation of the Saito Cabinet

by

Shiro Yamamoto

After the so called "5.15 Affair", in May 1932, was formed the Makoto Saito national Cabinet, which, as a result, brought to an end of the party cabinet, but the circumstances of the formation of this cabinet do not seem to have been enough studied.